

花の百名山

田中澄江が著した「花の百名山」というエッセイがある。3年ほど掛けて「山と溪谷」に掲載された百山のエッセイが、1980年に文芸春秋社から単行本になり、その3年後には文庫本に形を変えた。

「花の百名山」は、それに先立つ深田久弥の「日本百名山」にはなかったものを含んでいると思う。日本で名勝が認知されるためには、歴史的背景が必須だというのが、両書ともそれは踏襲している。だが、深田が百山を選ぶにあたり、山の高さ、品格や個性を重んじたのに対し、田中の選択には、女性らしい感受性と若いとき結核を患った体験のせいか、森や花の香り、清らかな水、人の健康、人混みからの逃避が絡みついている。田中には日本経済の高度成長がもたらした、空気や水の汚染、公害病の憂鬱、大都会の膨張が、色濃く反映しているのかもしれない。

「日本百名山」が描く山々は、どっしりとして動かないという印象が強い。「大山鳴動してネズミー一匹」のたとえどおり（引用が少なからず間違っているが）、富士山の噴火が予言され、それが当たったとしても、山体がなくなることはない。東北の磐梯山は明治時代に大噴火をおこし、裏磐梯の新しい景観が生まれるほど、山体が大きく崩落したが、それがあってもなくても百名山の一つだったろう。

ところが、「花の百名山」は移ろいやすい。山とその山にしかない花との強い結びつきは、ハヤチネウスユキソウとか、チョウカイフスマとか、その例は多くない。山の花たちもまた旅人であり、多くの山々にまたがってさすらっているように見える。

過去100年間で地球の平均気温が0.5度上昇したという。しかし、その原因には太陽活動の活発化も含まれていて、二酸化炭素のような温室効果ガスだけの仕業でないらしい。理由はともあれ、今の気温上昇がもたらす身の回りの変動は、人の一生のうちに十分感知できるスピードであるらしい。ある山のある川の水量が、子供の頃に比べ減ったという話を新聞で読んだ。気温が上がることによって、川面から蒸発する水分が増えたのではないかという。

しかし、われわれの目の前で、1万年前のブナ林の例のように（注）、ある植物が北進を開始したり、高山植物がその山の山頂に追いつめられたりするだろうか。植物の移動は遅いのかもしれない。

山歩きと花たちとの出会いは、人によって様々である。田中澄江が選んだ「花の百名山」は、その一例ともいえる。だから1995年頃、同じ田中澄江が監修し、NHKが作成した「花の百名山」という映像では、山も花も組み合わせも、文庫本と大きく異なる。山と花を組み合わせると「意匠」と百座の選択は残っているものの、別な作品と思える。よく知られるハクサンイチゲのお相手は、富良野岳（北海道の山）と槍ヶ岳、私の好きなハクサンコザクラのお相手は、火打岳（信越の山）と会津駒ヶ岳と変化している。

映像では、10分間の一作ごとに、その山とお花畑を熱愛する人が登場する。自然公園の管理人だったり、山小屋の主人だったり、山の花の写真家だったりする。渡辺美佐子のナレーションとは別に、その人が花心を語る。多くの女性が登場するのは、原作の故だろうか。

振り返って、自分と山の花たちの付き合いはどうだったろう。青春時代、大雪山系の黒岳と旭岳を結ぶ御鉢平で、チングルマ、ハクサンイチゲ、ツガザクラ、アオノツガザクラの大群落に遭遇し、高山植物との交流が始まった。しかし、その後、ある山とある花のペアは、私のイメージの中で成立しなかった。それがなぜだかわからない。

コバイケイソウ、ハクサンフウロ、シナノキンバイ、ハクサンコザクラ、ミヤマキンポウゲ、ニッコウキスゲ、ミツバツツジ、フジアザミ、コマクサ、マツムシソウ、イワカガミ、などなど。かれらは、名山の近景として、広く、薄く眺められていたのかもしれない。そのためだろう、花だけをクローズアップした写真がほとんど残されていない。足の弱った現在、山の花たちの姿を撮り溜めておかなかったことをひどく後悔している。

(注) 太陽活動の活発化に伴い、日本列島も1万3千年前ぐらいから温暖化が始まった。ブナは北進を開始し、北海道南部の黒松内に至った。その北進速度は、1年に100から200メートルだったという。
